様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ９ 月 １５ 日現在

機関番号：２２６０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０１１５６

研究課題名（和文）外国人児童生徒のための小・中・高の接続教育プログラムの開発と運用

研究課題名（英文）Articulation Program for Foreign Children (K-16) Ensuring Continuity in Language Proficiency and Social Skills

研究代表者
加藤　由香里（KATO, YUKARI）

首都大学東京・国際センター・教授

研究者番号：９０３７６８４８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は，学習に関心を持ちにくい外国人児童生徒に対して，小学校から大学進学までの各学習段階に必要な「学習思考言語」と「社会スキル」を組み合わせた実現例を示すことにより，彼らが学習意欲を高め，積極的に現在の学習を意味づけることを目指した。外国人児童生徒の学力問題について，幼児教育，中等教育，高等教育の専門家が集まり，問題を抱えた子供たちに対してどう接していくかについて議論を行った。その結果，「社会生活言語」は来日後1-2年で習得が可能であるが，教科学習に必要な「学習思考言語」は，5-7年の期間が必要なため習得が難しいこと，特に，低学年で来日した場合は，学習上の問題を抱えやすいことが確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
加藤は，2015年から愛知県主催の「外国人児童生徒等による多文化共生日本語スピーチコンテスト」に審査委員長としてかかわり，外国人児童生徒ならびに，保護者，支援者らとの情報交換を行ってきた。また,大島は，小学校の教員と幼稚園・ 保育園の保育者の言語に関する意識を継続的に調査し，保育者が視覚的補助教材や「遊び」が，児童らの文章理解と構文力の発達を促す可能性を見出した。中等・高等教育の分野では，北野が，中等高等教育機関の教員を対象として,ワークショップを企画し，教育力の支援を試みた。佐藤は高等教育における体験型学習を超えた，異文化理解教育の在り方について新たな提案を行っている。

研究成果の概要（英文）：The objective of this research is to promote teachers and supporters collaboration for curriculum articulation for foreign students in Japan.
This study provides the examples with language skills for basic subjects and social skills for the foreign students with diverse expectations for job performance. Through collaboration between Japanese language teachers and primary and secondary school teachers, it is showed that the effective teaching does not only comprise a modest transmission of knowledge from teachers to students. In its place, it is soft skills are a necessity for teachers and supporters who toil in a high-performance setting, ultimately promoting efficiency. This project addressed an urgent need to take on the contest of globalization which is heavily reliant on the capacity of a nation's inhabitants. Goals of successful articulation are both to provide a smooth transition between levels, and, by so doing, to encourage retention up the curriculum.

研究分野：教育工学

キーワード：社会スキル　　キャリア教育　　学習ポートフォリオ　アーティキュレーション

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

2014 年の文部科学省の調査によれば，初等・中等教育に在籍する外国人児童生徒は約 73,000 人であり，そのうち日本語指導が必要な児童生徒は 29,000 人に達する。外国人児童生徒の日本語学習については，日常生活に必要な「社会生活言語」は来日後 1-2 年で習得が可能であるが，教科学習に必要な「学習思考言語」は，5-7 年の期間が必要とされる。特に，低学年で来日した場合は，学習上の問題を抱えやすく，不登校などの問題も報告されている（宮島 1999）。

この問題に対応するため，日本語指導の必 要な児童生徒が一定数以上の学校には専任教員を特別に配置する措置がとられている。 しかし，支援を必要とする児童生徒が「５人未満」の「少数在籍校」では，担任教員と自治体の通訳，地域ボランティアなどに指導が任せられている。このような「少数在籍校」は，外国人児童を受け入れている学校全体の 9 割を占めており，担当者の人事異動や退職により，苦労して積み上げた指導法や教材が継続されにくい状況にある。

その結果，外国人児童生徒を受け入れる度に，支援担当者が試行錯誤を繰り返すことになり，現場では大きな負担となっている。また，外国人児童生徒を対象としたフィールド調査からも，初等・中等学校での学力が，高校・大学進学など，その後の「進路選択」に大きな影響を及ぼすことも明らかにされている（志水 2008）。このように，外国人児童生徒の学力問題は，教育学・教育社会学などの諸分野から，その実態が明らかにされつつあるが，彼らの学力向上につながる「学習思考言語」をどのように教えていくのか，具体的な提案は行われていない。

２．研究の目的

外国人児童生徒にとって，新しい教科を不十分な言語能力で学ぶことは非常に難しいため，学習意欲が減退したり，不登校などの問題を抱えたりしやすいことが報告されている。

また，児童生徒らは，「通訳・翻訳者」，「介護従事者」，「科学技術者」などの日本社会で活躍する知的職業に従事する外国人と 接触する機会も限られており，学習に関心を持ちにくい状況に置かれている。

外国人児童生徒の学力問題を解決するた めには，個々の教員，日本語支援ボランティアが行ってきた努力や工夫を共有化して，再利用をすすめる仕組みが必要である。加えて，習得に時間を要する「学習思考言語」については，小学校から大学までの教科内容に対応させた指導方法の提案と各学習段階の到達 基準の明示も有効であると考えられる。

そこで，外国人児童生徒に対して，日本社会で活躍するための「日本語」と「社会スキル」の実現例（ロールモデル）を映像で示し，彼らの学習意欲を高め，現在の学習を積極的に意味づけることを支援する。本研究では，外国人児童生徒の多様な日本 語のレベルに合わせて，小学校から大学進学 までの各学習段階に必要な「学習思考言語」 と「社会スキル」を整理し，映像と多言語による解説を用いた「評価基準表」として実現することを目標とした。これにより，外国人 児童生徒は，「将来の希望する職種に必要な言語能力，ならびにスキル」と「現在の習得状況」を比較でき，長期的な視野からの能力獲得活動に取り組むことができる。

３．研究の方法

本研究では，インターネット上に WEB サイト（http://lms.katoyukari.net）を構築し，国内外で活動する日本語教師，ならびに初等・中等教育経験者に対して利用を呼び掛けた。この e ラーニング学習サイトを利用して， 外国人児童生徒に対する教育経験の浅い関係者でも専門的な知識と技能を学ぶことができる。また，インターネット上で，支援者らが自らの実践活動を振り返るポートフォリオ（https://lms.katoyukari.net/）の機能も加えた。

本研究では，教師と支援者が外国人児童生 徒の多様な日本語のレベルと経験に合わせて容易に利用できる指導事例データベースとその活用を記録・共有するポートフォリオを開発することを目指した。

４．研究成果

代表者の加藤は，日本語教育歴と語学 e ラーニング開発の実績を持ち，日本語教師，ならびに留学生担当者向けのセミナー講師経 験も豊富である。2015 年からは，愛知県多文化共生推進室が主催する「外国人児童生徒等 による多文化共生日本語スピーチコンテスト」に審査委員長としてかかわり，外国人児童生徒ならびに，保護者，支援者らとの情報交換を行ってきた。

本研究に関連して，日本語教師の実践指導力の向上を目指して，専門的な知識・技能を学ぶ WEB サイト「語学教師の成長サポート」と自らの活動を振り返る e ポートフォリオ「かとプロ」を構築して運用してきた。この e ラーニング開発研究から，教員らの情報共有のためには，参加者同志の交流を促す相互メンタリングやティーチング・ポートフォリオ（教育業績記録）が効果的にあることが明 らかにしている。また，研究分担者である北野とともに，教職員向け研修会（大阪府立大学高専ティーチング・ポートフォリオ WS）においても，スーパーメンターとして専門や所属の異なる教員同士のメンタリングの支援を行ってきた。

さらに，国内教育機関の研修会（福井工業高等専門学校創造教育開発センター主催ＦＤ研修会，南山大学経営学部・大学院主催ＦＤ研修会，大阪府立大学工業高等専門学校ティーチング・ポートフォリオ・ワークショップ）においても，教員・職員らに対して，教育評価，ならびに参加者間の情報共有の方法について助言を行った。

分担者である大島は，長年にわたって障害児教育に携わり，聾教育における言語発達指導，ならびコンテンツ開発に実績を持つ。加えて，小学校の勤務経験を活かして，幼児教育と小学校教育の接続プログラム等にも関心を寄せている。このプロジェクトに関連して，小学校の教員とその小学校に就学する児童の母園である幼稚園・保育園の保育者の言語に関する意識について継続的に調査を行っている。この調査から，保育者が視覚的補助教材や「遊び」を効果的に利用して児童らの感情に働きかけることにより，児童らの文章理解と構文力（文を読んで話す能力）の発達を促す可能性を見出している。

中等・高等教育の分野では，分担者である北野が，勤務校である工業高等専門学校において，ティーチング・ポートフォリオを用い た教育改善に取り組み，その実施方法，教育 効果について複数の高等教育機関で講演している。さらに，中等高等教育機関の教員を対象としたワークショップを企画し，中等ならびに高等教育の教職員を対象とした教育 力の支援を行った。

また，研究代表者である加藤とともに，教職員向け研修会において，メンターとして活動した教員が専門や所属の異なる教員同士のメンタリングをどのように捉えているのか，また，その捉え方はメンター経験を重ね ることによって変化していくのかを明らかにする研究にも取り組んでいる。

分担者の佐藤は， 能動的な学びを支援する新しいシステム開発に取り組み，成果を上げている。特に，中等・高等教育の分野を中 心に，国際交流イベントに参加した学生らが，グループ活動，ならびに，バディ活動に積極 的に取り組むことで，単なる体験型学習を超えた，異文化理解教育の在り方について新たな提案を行っている。今後は，外国人児童生徒の学習段階に応じた支援の枠組みの構築 に向けてさらなる実証調査を予定している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　6件／うち国際共著　2件／うちオープンアクセス　6件）

１．著者名 Yukari Kato	４．巻 vol.17, No.1
２．論文標題 Effects of the Peer Mentoring Process in the Development of a Teaching Portfolio	５．発行年 2018年
３．雑誌名 The Journal of Information and Systems in Education	６．最初と最後の頁 50-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 加藤由香里・東田卓・金田忠裕・北野健一・山下哲・土岐智賀子・石丸裕士・古田和久・早川潔・和田健・倉橋健介	４．巻 Vol.23, No.3
２．論文標題 TPワークショップでのピア・カンファレンスを通じたメンター教員の成長	５．発行年 2018年
３．雑誌名 日本高専学会誌	６．最初と最後の頁 33-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Yukari Kato, Suguru Higashida, Tadahiro Kaneda, Ken’ichi Kitano, Kazuhisa Furuta, Kiyoshi Hayakawa, Takeshi Wada, Kenshuke Kurahashi, Hirohito Ishimaru, Chikako Doki, Satoshi Yamashita	４．巻 Vol.12, No. 1
２．論文標題 Awareness of Mentors in the Peer-Mentoring Conferences	５．発行年 2018年
３．雑誌名 International Journal for Educational Media and Technology	６．最初と最後の頁 41-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 Yukari Kato	４．巻 Vol.17, No.1
２．論文標題 Effects of the Peer Mentoring Process in the Development of a Teaching Portfolio	５．発行年 2018年
３．雑誌名 The Journal of Information and Systems in Education	６．最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 大島光代ほか	4．巻 11
2．論文標題 保育者・教員養成機関大学における地域発信としての『みどりのこども会』の実践と考察－ESD（Education for Sustainable Development）をテーマにした幼児向けイベント事業の展開をとおして－	5．発行年 2018年
3．雑誌名 名古屋学芸大学紀要	6．最初と最後の頁 26-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Yukari Kato	4．巻 Vol.13, No. 1
2．論文標題 Mentors’ Awareness of Effective Consultation Skills in a Teaching Portfolio Workshop: A Text-Mining Approach,	5．発行年 2019年
3．雑誌名 International Journal for Educational Media and Technology	6．最初と最後の頁 35-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 鯵坂誠之、東田卓、辻元英孝、室谷文祥、栗田佳代子、加藤由香里	4．巻 第53巻
2．論文標題 2018年度アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップ報告	5．発行年 2020年
3．雑誌名 大阪府立大学工業高等専門学校研究紀要	6．最初と最後の頁 47-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計16件（うち招待講演　1件／うち国際学会　8件）

1．発表者名 Yukari Kato
2．発表標題 Mentors’ Awareness of Effective Consultation Skills in a Teaching Portfolio Workshop: A Text-mining Approach,
3．学会等名 ICoME 2018，忠北大学校，韓国（2018年8月16-17日）（国際学会）
4．発表年 2018年

１．発表者名 加藤由香里
２．発表標題 理工系教育の世界展開に向けた科学技術日本語教育の課題と展望-研究留学生の受け入れから高専教育の輸出まで-
３．学会等名 第10回国際日本語教育・日本研究シンポジウムThe Hong Kong Polytechnic University, China（2018年12月8日-9日）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 大島光代ほか
２．発表標題 幼児向けESD教育を目指す「みどりの子ども会」事業の実践
３．学会等名 日本保育学会 自主シンポジウム
４．発表年 2018年

１．発表者名 大島 光代ほか
２．発表標題 「幼児期からの聴覚学習」（１）－教育現場に活かせる聴覚障害児教育の『聞く』『話す』スキル－
３．学会等名 日本LD学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Shinichi Sato, Makoto Kageto
２．発表標題 The Use of 360-degree Movies to Facilitate Students' Reflection on Learning Experiences
３．学会等名 International Symposium on Educational Technology（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Tomomi Sato, Junko Araki, Satoru Konno, Shinichi Sato
２．発表標題 Development of Smartphone Application "Family Portfolio" for Parent Development
３．学会等名 International Symposium on Educational Technology（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Shinichi Sato, Makoto Kageto
２．発表標題 Consideration of the Use of 360-degree Videos Recorded During Student Fieldwork
３．学会等名 International Conference for Media in Education（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Y. Kato, S. Higashida, T. Kaneda, K. Kitano et al.
２．発表標題 Growth of Mentor Teacher through the Peer-Mentoring Conferences in a Teaching Portfolio Workshop
３．学会等名 ICoME 2017（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 影戸誠・佐藤慎一
２．発表標題 島国日本とカンボジア・フィリピンとの協働授業
３．学会等名 日本教育メディア学会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 加藤由香里・東田卓・金田忠裕・北野健一他
２．発表標題 TP作成を支援するピア・カンファレンスにおけるメンターの成長
３．学会等名 高専学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 大島光代
２．発表標題 幼児期の語彙及び音韻意識の獲得状況と小学校1年生における読解力の調査結果との関連性－Ａ県Ｂ市Ｃ保育園・Ｄ小学校における追跡調査の実践から－
３．学会等名 日本特殊教育学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 大島光代
２．発表標題 幼小接続期の幼児における音韻意識の獲得に関する保育者・教育者の意識－Ａ県内の小学校及び地域幼稚園・保育園の調査結果から－
３．学会等名 日本LD学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 北野健一・鰺坂誠之・金田忠裕
２．発表標題 地元企業と連携したスタッフ・ポートフォリオの作成
３．学会等名 高専学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 Yukari Kato
２．発表標題 The Different Images of Good Mentors between Novice and Experienced Mentors: Based on the Analysis of a Text-Mining Approach
３．学会等名 International Conference for Media in Education（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yukari Kato
２．発表標題 Developmental Stages of Good Mentors: Comparison between Novice and Experienced Mentors
３．学会等名 International Conference, Innovation in Language Learning（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 加藤由香里
２．発表標題 理系留学生のための日本語教育
３．学会等名 日本教育メディア学会第2回研究会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

加藤由香里WEB　研究プロジェクト http://www.katoyukari.net/project.html

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	大島　光代 (OSHIMA MITSUYO) (00639164)	名古屋学芸大学・ヒューマンケア学部・准教授 (33939)	
研究分担者	佐藤　慎一 (SATO SHINICHI) (10410763)	日本福祉大学・国際福祉開発学部・教授 (33918)	
研究分担者	北野　健一 (KITANO KENICHI) (20234263)	大阪府立大学工業高等専門学校・総合工学システム学科・教授 (54401)	